保育者が用いるオノマトペの世界

近藤　綾・渡辺大介

The characteristic of onomatopoeia at the preschool teacher

Aya Kondo and Daisuke Watanabe

本研究では，保育活動において保育者が幼児と接するさいに用いるオノマトペを確認し，その特徴を捉えていくことを目的とした観察を行った。観察は，自由保育場面において，保育者を中心として展開される活動をビデオ撮影した。その後，得られた観察記録からオノマトペを抽出し，それらについて感覚的様相に関する分類を行った。その結果，保育者は幼児に対して動作に関するオノマトペを最も多く使用する傾向にあることが明らかとなった。よって，動作に関するオノマトペに焦点をあて，動作とオノマトペの観点から，保育活動における保育者が用いるオノマトペの世界を捉えていった。

キーワード：オノマトペ，保育者，保育活動

問題と目的

「胸がキュンとする」，「胸がドキドキする」，「胸がチクチクする」といった表現はそれぞれ異なる状況を我々に思い起こさせる。これは，キュン・ドキドキ・チクチクがそれぞれ異なる感覚を描写しているためである。このように，「胸が」と「する」の間に入る言葉が果たす役割は非常に大きい。これらの言葉はオノマトペ(擬音語・擬態語の総称)と呼ばれるものである。オノマトペは，感性の言葉と考えられており，日常会話から文学作品に至るまで幅広く用いられ，近年，様々な研究分野で注目されている(e.g.，有働，2002；吉村・関口，2006)。

日常場面において，子ども，特に言語習得途上にある幼児はオノマトペを多用する。また，子どもと接するとき，保護者や保育者，子どもの周囲の人々は，オノマトペを多用する傾向にあるといわれている(福田，1999；丹野，2005)。このように考えると，保育場面では，幼児と保育者とをつなぐ架け橋として，オノマトペが重要な役割を担っている可能性が考えられる。しかし，子どもを対象とした従来のオノマトペ研究では，言語発達や表現力の指標として，子ども側が発するオノマトペに焦点化した検討が中心であり(e.g.，早川，1981；池田・戸北，2005)，子どもと接するときに大人が発するオノマトペ，すなわち保育場面における保育者が使用するオノマトペについてはほとんど語られていない。

保育者に注目した数少ない研究(原子・奥野，2007；近藤・渡辺・大田・伊藤・小津・越中，2008)のうち，原子・奥野(2007)では，保育活動において保育者が使用するオノマトペ表現がどのように

機能し，効果的に働いているのかについて調査している。すなわち，絵画及び制作活動，リズム運動，歌唱場面，保健指導といった保育指導場面において保育者が表出したオノマトペを抽出し，それらに対する幼児の反応について観察しているのである。そして，保育者は動作や動きの状態を表すときに多くのオノマトペを使用しており，それらに対する幼児の反応はいずれも動作が滞ることなくスムーズであったため，動作や動きを表す言葉と一緒にオノマトペを活用することで，より効果的に指導することができたと報告している。

しかし，原子らの研究では，保育者が発するオノマトペが少なかったとだけ記されており，実際のオノマトペ数やその傾向等を具体的に把握することはできない。また，観察結果は各場面で確認されたオノマトペの発生状況のまとめの記述に留まっているため，保育者がどのような知覚的側面を表現するさいに，幼児に対してオノマトペを用いているのかについては描かれていない。他に，近藤ら(2008)は，保育活動，中でも自然体験活動に焦点をあて，保育におけるオノマトペに関する実態調査を行い，観察結果から保育者が用いるオノマトペの有効性を報告しているが，これも今後の検討可能性の一つとしての提言に留まっている。以上のことから，教育者である保育者が幼児に対して用いるオノマトペについて確認しておくことは必要であるだろう。このように，オノマトペを用いて保育者が何を描写しているのかについて捉えることで，保育場面におけるオノマトペの特徴が探れると考えられる。

そこで本研究では，保育活動において保育者が幼児と接するさいに用いるオノマトペについて確認し，その特徴を捉えていくことを目的とする。具体的には，自由保育場面での活動を保育者中心に観察し，オノマトペを抽出する。そして，抽出されたオノマトペについて分類し，保育者がどのようなオノマトペを使用しているのかについて量的に把握する。その後，分類から得られた傾向とそれらの状況を併せて記述することで,保育者が用いるオノマトペの特徴をより詳細に捉えていく。

方　法

観察対象

H 県内 H 幼稚園の年中児クラスの保育者 2 名とクラスの幼児(35 名)であった。オノマトペは個人の生活環境や言語環境に大きく依存し，その使用頻度や内容については個人差が大きいとされている(吉井，1983)。よって，個人的要因を少しでも軽減して一般的な傾向をつかむために，本研究では観察対象保育者を 2 名とし，2 者間で共通する特徴から傾向を捉えることにした。なお，2 名の保育者はいずれも女性であり，保育者 A は保育経験 17 年，保育者 B は保育経験 24 年であった。

観察期間と観察時間

2008 年 4 月から 7 月までの間，週 1 回の割合で計 12 回行った。1 回の観察は，8 時 50 分頃から 10 時 10 分頃までの約 80 分間であり，この時間は主として自由保育活動を行う時間であった。

観察手続き

イベントサンプリング法・非参加観察法により観察を行った。観察は，2 名の観察者が観察対象である 2 名の保育者をそれぞれデジタルビデオで撮影した。なお，音声を明瞭に録音するために，保育者にはワイヤレスマイクを装着してもらった。本研究では，保育者が幼児と接する日常的なか

かわりの中で使用するオノマトペを把握したかったため，保育者にオノマトペを意識させないよう，観察目的の説明時では声かけについて観察することだけを告げ，オノマトペのことは伏せておいた。観察した自由保育活動は，その内容が毎回異なるものであり，園の各所で様々な活動が行われていたため，観察者は保育者の後を追ってビデオで撮影した。

結果と考察

対象語

2人の保育者について観察した各12回のビデオ記録から，保育者が発したオノマトペをその文脈とともに文字化した。オノマトペ抽出では，その語がオノマトペであるか否かについて確認するために，日本語オノマトペ辞典(小野，2007)を参考とした。なお，オノマトペは，多種多様に変化させて用いられる性質を有しているため，辞典に記載されていないオノマトペも多々存在した(例えば，プッチン・ボヨヨン)。よって，そのような語に関しては，2人の評定者で前後の文脈を確認し，辞典にある語の変容ととれるものはオノマトペとして対象語に含めた。一方，歌や単なるかけ声(オイショ等)は対象から除外した。また，保育者が同じ文脈内において連続的に同じオノマトペを発した場合は，その語をひとまとめにして1カウントとした。その結果，保育者Aと保育者Bから抽出されたオノマトペは，それぞれ203語と144語であった。

分類

対象語となったオノマトペについて，2名の評定者により福田・苧阪(1992)を参考とした五感に基づく分類を行った。この分類は，オノマトペが感覚的な意味合いを強く有している言葉であることから，知覚的側面を捉えるものとして使用されている。本研究では，保育者が自由保育活動において描写するオノマトペの特徴を捉えることを目的としているため，外界の感覚的様相にもとづくこの分類を採用した。

分類項目は，①視覚(「ピカッ」と光る)，②聴覚(「カァカァ」鳴く)，③触覚(「ベタベタ」する)，④動作(「グルグル」回る)，⑤気分・心情(「ドキドキ」する)の5項目である。なお，分類にあたり，1つの語で異なる感覚刺激，あるいはそれらの融合したものを表現していると思われる場合は，それらの内の主たる感覚に分類した。

オノマトペの傾向

保育者AとBのそれぞれの分類結果をTable1に示す。また，各分類項目で確認されたオノマトペの具体例をTable2に示す。評定者間の一致率(K)は，保育者Aでは.804，保育者Bでは.623であり，それぞれ実質的に一致していることが確認された。なお，不一致の対象語については，2人の

Table1　保育者A･Bがそれぞれ表出したオノマトペの分類

	視覚	聴覚	触覚	動作	気分･心情	総数
保育者A	48	41	19	89	6	203
	(23.6)	(20.2)	(9.4)	(43.8)	(3.0)	(100.0)
保育者B	33	43	14	54	0	144
	(22.9)	(29.9)	(9.7)	(37.5)	(0.0)	(100.0)

注. 上段:表出数, 下段:割合.

Table2　表出されたオノマトペの具体例

	視覚	聴覚	触覚	動作	気分・心情
保育者A	ピカピカ	パカッ	ヌルッ	クルクル	ドクドク
	ツルツル	トントン	サラサラ	コロコロ	クラクラ
	ウジャウジャ	ボコボコ	トロトロ	ペタペタ	コツコツ
保育者B	グラグラ	ドンドン	ベチャベチャ	ギュッ	なし
	ピタッ	ペロペロ	トローリ	トコトコ	
	ピクピク	バーン	ムニュムニュ	チョンチョン	

評定者がビデオ記録を再検討したうえで分類項目を決定した。

保育者 A の分類結果からは，動作に関するオノマトペが最も多く，次いで視覚・聴覚，そして気分・心情に関するオノマトペが最も少ないことがよみとれた。また，保育者 B からも同様に，動作に関するオノマトペが最も多く次いで聴覚・視覚，そして気分・心情に関するオノマトペは表出されなかったということが示された。つまり，保育者間で対象語数に異なりはあるものの，両者は同じ傾向を示していることが確認された。よって，本研究の結果は原子・奥野(2007)が，保育者は動作や動きの状態を表すときに多くのオノマトペを使用していると記した点を具体的に数値化して確認し，より一般性のあるものとして裏付けることができたといえるだろう。

動作に関するオノマトペ

保育者はなぜ動作に関するオノマトペを多用するのだろうか。ここで，保育活動における保育者の役割を考えてみたい。本研究の観察場面において保育者は，各所で遊んでいる幼児の様子を見て回る，あるいは一時的に遊びに加わるといったかかわりを持っていた。そのような中で，保育者の使用するオノマトペに注目したということは，オノマトペで保育者の幼児に対する働きかけという役割の一側面を切り取ったといえるだろう。このように捉えると，自由保育場面では幼児も保育者も絶えず活動・行動しているのであるから，オノマトペの中でも動作を描写するオノマトペが最も多かったことは，自然な傾向であると考えられる。

では，保育者はどのように動作に関するオノマトペを用いていたのだろうか。この点について探るにあたり，観察記録から動作に関するオノマトペ場面を文脈とともに確認した。すると，記録から特徴的な 2 種類の場面をよみとることができた。1 つは，保育者が自身の動きとともに動作に関するオノマトペを用いている場面，あるいは幼児とともに動きながら動作に関するオノマトペを用いる場面である(保育者 A，保育者自身 42 語，共同 9 語：保育者 B，保育者自身 25 語，共同 2 語)。もう 1 つは，保育者が幼児に対して動きを誘発するさいに動作に関するオノマトペを用いる場面である(保育者 A，10 語：保育者 B，15 語)。Table3 に保育者 A と B のそれぞれからランダムに抽出された状況についての具体例をいくつか示す。

1) 保育者の動きとオノマトペ　観察記録からは，保育者がそのとき伝えたい動きに沿った動作に関するオノマトペを使用して，幼児にとってより臨場感の増す説明を行う姿が確認された。動作とオノマトペについては，ここ数年研究が進められているスポーツオノマトペの観点からその重要性がみてとれる(e.g., 藤野・井上・吉川・堀江・仁科・山田・匂坂，2005；藤野・吉川・竹中・仁

科・山田，2007)。これは，スポーツで用いられているオノマトペの研究であり，主に「動作表現の補助」，「動作表現の簡略化」といった認知に働きかけるLevel 1と，「モチベーションの向上」，「動作パフォーマンスの向上」といった行動に働きかけるLevel 2が存在すると考えられている(藤野ら，2005)。そして，これらのオノマトペの主な長所としては，‘言葉では言い表せない複雑な動作内容も簡単に説明できる’あるいは‘複雑な動作やコツを学習するさい，その時の動作内容をオノマトペに置き換えて覚えると効果がある’といったことが語られている。

これらの観点を踏まえると，保育者が動作とともにオノマトペを用いて幼児に説明等の働きかけを行うことの重要性がうかがえる。すなわち，保育者自身が動作とともにオノマトペを用いて幼児に働きかけることは，Level 1の認知に働きかけることにあたり，幼児とともに動く中で保育者が動作に関するオノマトペを用いることは，幼児の行動に働きかけるLevel 2に値すると捉えられるのである。よって，保育者の用いるオノマトペは，幼児の認知レベルと行動レベルの双方に働きかけて遊びを発展させていく役割を担っていると考えられるだろう。また，このような動作を描写するオノマトペを保育者が説明時に用いている根底には，遊びを広げ，展開させようとする保育者の思いが込められていると捉えられるのではないだろうか。

2) 動作誘発時のオノマトペ　観察記録からは，保育者が幼児の行為を促すさいに動作に関するオノマトペを使用して行為を遂行させようとする姿が確認された。つまり，この場合に用いるオノマトペは，幼児に対する指示や指導等の意味合いが強く反映されているものと捉えられる。このようなオノマトペを用いた保育者の声かけは，言語の発達過程と関連付ける(福田，1999；丹野，2005)と効果的な働きかけであることがうかがえる。すなわち，人は一般に名詞や動詞から語彙を増やしていくため，形容詞や形容動詞を用いた動作伝達は幼児にとって困難であり，その場合，動作に伴う音や動作から受ける印象を感覚的に捉えるオノマトペは，語彙の少ない幼児にとって理解しやすい語となるのである。よって，保育者が促しを行うさいに動作に関するオノマトペを使用することは，幼児に行為を容易にイメージさせる，あるいは何をすればよいのかについて容易に理解させることにつながり，結果的に保育者が意図する動作を効果的に導き，遂行させることにつながる働きかけであるといえるだろう。また，このように幼児の行為を促す状況は，保育活動全般で生じるた

Table3　動作に関するオノマトペが用いられた具体的状況

1) 保育者自身が動く，または幼児とともに動くさいにオノマトペを用いた場面
① 保育者が砂場でスコップを持ち，山の作り方を説明するときに「こうやって(土をかけて)ペタペタペタって」
② 保育者が砂場でジョーロの使い方を説明するときに「こういうふうに，グルリーングルリーン」
③ 保育者が葉笛の作り方を教えるときに「この葉っぱをピッと切って」
④ 保育者が幼児とともにウサギを持ち上げながら「ギュッと持って。ギュッて持ち上げて」
⑤ 保育者が幼児とともに傘をたたみながら「こうやってね，クルクルクルー」
2) 保育者が幼児の動きを誘発するさいにオノマトペを用いた場面
① 保育者が幼児に土を払って靴を脱いでくるように促したときに「ちょっと脱いでおいで，トントンしてから」
② 保育者が口に何か入った幼児に出してくように促したときに「ペッしておいで，水道のところで」
③ 保育者が袋のひもを締めるよう幼児に指示したときに「ギュッってひも引っ張って」
④ 保育者が水につけたストローを吹くよう幼児に指示したとき「プクプクプクーって，フーッって」
⑤ 保育者が木の周りを回るよう指示するときに「グルーって回っておいで」

め，これらの状況下でのオノマトペ使用は保育場面におけるオノマトペの特徴の中で重要な要素となる可能性を秘めているといえるのではないだろうか。

まとめと課題

ここまでは，主に動作に関するオノマトペに焦点化した考察を行ってきたが，これらのことは，動作以外の描写に関するオノマトペにおいても通ずるものがあるといえる。そしてそこには，意識的あるいは無意識的かは別として，保育者が子どもと接する中で感覚的にオノマトペを用いて外界を描写している姿がうかがえるだろう。これは言い換えれば，幼児と保育者とをつなぐ架け橋としてオノマトペが有効に機能していることを暗示しているといえるだろう。本研究では，自由保育活動において保育者の使用するオノマトペを観察し保育者の使用するオノマトペの傾向を確認した。そして，その特徴として最も多く確認された動作に関するオノマトペについて焦点化し，動作とオノマトペの観点から保育者の姿をよみとることで保育活動におけるオノマトペの世界を捉えてきた。これまで語られてこなかった保育者が使用するオノマトペの一側面を言及できた点において，本研究は多少なりとも意味があるといえるだろう。

最後に今後の課題を記しておく。本研究では，保育者のオノマトペにのみ焦点をあて，幼児の反応に関しては詳しく扱わなかったため，オノマトペがどのように有効に機能しているのかについては把握できていない。よって，この点に関する記述が今後は必要といえるだろう。それとともに，自由保育活動以外の活動との比較や，幼児の発達的な側面についての言及もいまだ十分にはなされていないことから，その必要性もうかがえる。また，分類にあたって本研究では，各オノマトペの意味合いを最も強く反映している項目へとそれぞれのオノマトペを分類したが，実際のところ分類し難い語もいくつかみられた。この点は，近年注目されているオノマトペのクロスモダル性(例えば視覚と聴覚の融合・共感覚)の部分にあたる(吉村・関口，2006；苧阪，1999)。よって，今後はオノマトペのクロスモダル性についても探っていく必要があるといえよう。オノマトペは非常に曖昧な言葉であるため，いまだ扱いにくいものとされているが，我々の日常の中に確かに存在している。従って，今後もオノマトペの“キラリ”と光る要素が探られていくことを期待したい。

引用文献

藤野良孝・井上康生・吉川政夫・堀江　繁・仁科エミ・山田恒夫・匂坂芳典　(2005). スポーツオノマトペの実態について　東海大学スポーツ医科学雑誌，**17**，28-38.

藤野良孝・吉川政夫・竹中晃二・仁科エミ・山田恒夫　(2007). 運動教育に用いるオノマトペの基本周波数が握力に及ぼす影響　日本教育工学会論文誌，**30**(4)，305-314.

福田香苗　(1999). 幼児の発話にみられる擬音語・擬態語　苧阪直行(編著)　感性のことばを研究する―擬音語・擬態語に読む心のありか―　新曜社　pp. 155-174.

福田香苗・苧阪直行　(1992). 擬音語・擬態語の認知(16)―K 児の 3 歳 6 ヶ月時の観察記録より―　日本心理学会第 56 回大会発表論文集，814.

原子はるみ・奥野正義　(2007). 保育活動におけるオノマトペ表現の有効的機能に関する一考察　北海道教育大学教育実践総合センター紀要，**8**，167-174.

早川勝広　(1981)．育児語と言語獲得　言語生活，**351**，50 - 56.

池田仁人・戸北凱惟　(2005)．低学年児童の「気づき」の表現に関する研究―生活科におけるオノマトペの機能―　理科教育学研究，**45**(3)，1-9.

近藤　綾・渡辺大介・大田紀子・伊藤祥子・小津草太郎・越中康治　(2008)．保育における自然体験活動でのオノマトペ表現に関する実態調査　幼年教育研究年報，**30**，113-119.

小野正弘（編）　(2007)．擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典　小学館.

苧阪直行　(1999)．擬音語・擬態語の認知科学　苧阪直行(編著)　感性のことばを研究する―擬音語・擬態語に読む心のありか―　新曜社　pp. 1-26.

丹野眞智俊　(2005)．オノマトペ《擬音語・擬態語》を考える　あいり出版.

有働眞理子　(2002)．オノマトペから学ぶもの　兵庫教育大学研究紀要，**22**，13-21.

吉井　宏　(1983)．空間認識の方法と発達について－その(2)　オノマトペの発生と構造　美術教育学：大学美術教科教育研究会報，**5**，89-99.

吉村浩一・関口洋美　(2006)．オノマトペで捉える逆さめがねの世界　法政大学文学部紀要，**54**，67-76.

付　記

本研究にご協力を賜りました幼稚園の諸先生方に，心より感謝申し上げます。

（主任指導教員　杉村伸一郎）